

「教育漫才」と向き合う

荒井 英治郎 (信州大学学術研究院総合人間科学系)

1. はじめに

本稿は、2021年度に開講した教職科目(選択)「現代社会と教育問題」(2021年12月7日)の授業にオンラインゲストとしてご参加いただいたゲストティーチャー(田畑栄一氏:埼玉県越谷市立新方小学校校長)の講演内容を再構成したものである。記録作成に当たっては、本学の学生である中村文哉さんに尽力いただいた。記して感謝を申し上げたい。

2. ゲストティーチャーの話

(1) 日本の教育問題

【ゲスト】こんにちは。埼玉県越谷市立新方小学校の校長しております田畑でございます。今日は荒井先生のお声かけで皆さんとこのように「教育漫才」を通して、教育の問題についてお話ができるということ、とても楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

私は日本の学校教育の問題として一番に考えていかなければならないものは、自殺・不登校だと考えていて、これらは、子どもたちの教育の拒否なのではないかと思っています。もちろん不登校に関しては積極的な不登校ということで、個の適正を見極めて、今の教育課程に合わないために積極的に出て行くのは大賛成ですけれども、多くは人間関係のトラブルである等、

学校の雰囲気合わないというように、学校に大きな要因があるのではないかと捉えています。それで学校を去ってしまうのは忍びないと思っていて、その大きな要因が「いじめ」だろうと捉えています。それは、子どもだけでなく担任の先生であるとか人(クラスメイト等)が出すオーラである等様々なものが要因としてあり、温かい笑顔の学校にしていきたいというねらいの下に、「教育漫才」を開発して取り組んでいるところです。

もう1つ授業では、30代の頃から積み重ねてきたもので「学び合い」があります。全員の子どもの思考を活用して、全員の子どもが積極的に自分から発言するような指導をして、最後は全員が納得して理解するという指導方法です。「意見をつないでいく学び合い」を目指しながら国語科を中

心として進めています。本校の先生方の多くは、これを積極的に取り入れてくれていて、今現在、「意見をつなぐ学び合い」として、子どもたちが主体的に表現し合う実践を各教科等で進めているところです。

先ほどお話したように、「自殺・不登校・いじめのない温かい笑いのあふれる学校づくり」に取り組んでいきたいと思っています。その1番のマイナス要因は「言葉」と「暴力」です。さらに「教室の棘」と私は言っていますが、いじめにはならないけど睨まれたとか、咳払いとか、敏感な子どもたちは、そういうことを非常に敏感に感じとります。これが、「棘」です。もう1つは、「無意識のいじめ」というものもあります。先生を中心とした力関係での人間関係の「ピラミッド体制」を作っているということもあります。そこに、居心地の悪さを感じる子どもたちもいます。序列・競争というはもちろんいい意味もありますけれども、例えば、忘れ物をした人の名前を黒板に書くとか、宿題提出率を後ろの黒板にポイント化して張るとか、持久走大会で順位付けをするとか、表彰朝会で優秀な人をみんなの前で褒め称えるという教育が自殺・不登校・いじめに大きな要因になっているのではないかと捉えています。やはり学校は心理的安全性の担保、これはアメリカのシカゴの工場でどうやれば生産性が上がるかという研究データがありますが、その時に照明を明るくするか設備を整えるとか様々にしたのですが、結局最後は人間関係に落ち着いていく、つまりコミュニケーションが温かい関係にあると生産性が伸びるというエビデンスがあります。これは学校教育にもまさに当

てはまるのではないかと考えています。いかに1人ひとりの平等性や、安全性を担保していくかが学校教育のこれからの大きな課題であると捉えています。

様々な教科から考えていくと、今回の学習指導要領で1ついいと思うことは「カリキュラム・マネジメント」です。教科等横断的視点ということで、分断した教科ではなくて、様々にくっつけていこうという合科的な考え方、あるいは地域の人を授業に参加してもらい活用していこうという視点は非常にいいと思っています。各教科の特徴とすれば「見方・考え方」から対話を通して、意見をつなぎながら学び合いを通して正解を求めるのではなくて、納得解、1人ひとりが納得するような解を認めつつあるということで、大変よき方向に進んでいると捉えています。

もう1つは道徳が、「考えを議論する」ということが1つキーワードになっていて価値観の多様性を互いに認め合ひましようとして変わってきています。今まではどちらかというと道徳は価値項目に向かって、なんとなく先生の価値観を押し付けていたような感じがありますが、そういう必要性がなく「扱うこと」が大事で、多様性を認めて、色んな「えっ」と驚くような考え方を認めていくことが大事だと思います。

もう1つは、総合的な学習の時間です。個人の探究を尊重しながらも学校のプログラム通りに進めるということが非常に多いと思っています。例えば、6年生だったら国際理解。4年生は健康、5年生は福祉等と決まっていて、それを座学で勉強して形式的に体験させてコミュニケーションをとっていく。しかし、本当にそれでい

いのかと考えていて、子どもたちが本当にやりたい総合的な学習の時間にして、探究したい課題を選ばせて個人でもいいし、協働でもいいし、それを踏まえて体験させてもいいし、そして最後には「表現」という形に落とし込んでけるといいと思っています。

特別活動は話し合い、合意形成、意思決定という流れがありますが、学校現場では本当にこれができているのかと思っています。若者の投票率の低さは、やはり物事を変えた体験が小学校時代、中学校時代、高校時代にあまりないので、自分が選挙に行っても変わらないのではないかとこのころに要因があると考えています。だから多くの国民の変えようという意識が育っていないので、人任せで「政治なんて」というところが数値に現れているのではないかと考えています。

私が特に授業の中で問題だと思っていることは、一部の発言力のある子どもや優秀な子どもを中心とした授業が多くて多くの学校で展開されていることです。30代の頃から疑問を持っていて、やはり全員の子ども例えば30人がいるのであれば、そこに平等性があってその30人全員の子どもの考えを使って、誤答があって正答があってさまざまな意見があって、正答、納得解を追求していくという在り方がいいのではないかと考えています。全員発表、それは強制とか順番性ではなくて自分から意見をつないでいって、一人一人が主体的に参加していくという和やかな雰囲気を作っていく。それが大きな目標で理念として掲げています。言葉だけを取られると強制するような形でプレッシャーがかかると言

われますが、別に発言しなくてもいいのです。ただやはり将来的に発言させたい子もいるので、それは個人的に対話をしてクラスの雰囲気を作りながら進めているところです。全員結果が出るような形に持っていければいいと思っています。私は発言権の平等性ということに非常に重視して考えていますし、その根底には、「みんな同じ、みんな大事なのだよ」と相互承認していくことが重要で、現在もこの理念を基軸に授業をやっていきます。

(2) 教育漫才の概要

【ゲスト】 その中で「教育漫才」を開発してきました。一つの出来事が開発の引き金になりました。

ちょうど平成27、28年の1月だったと思いますが、寒い日に一年生の先生に頼まれて「昔の遊びでけん玉を教えてください」ということで、2階のフロアにいたのですが、そこにたまたまあるお母様が見えて、「相談がありまして、お話したいです」ということで、1時間待ってもらい、お話を聞きました。校長に他校の保護者が相談に来るということは、よほど重い事案だろうと気になっていましたが、ご両親、おばあちゃん、本人の4人で校長室に来ていました。子どもは別室に移して3人の話を聞きました。内容は、お子さんが小学校一年生で不登校になっているということです。11月から不登校になっているということで「大変ですね」と共感しながら聴いていたのですが、その中で驚いたのが、4月5月経った一年生が、連休明けにクラスを変え

られたという話を聞いたことです。耳を疑いました。「えっ」と思いました。おそらくそのお子さんは手のかかるお子さんだったと思いますが、一年生の4月5月ですよ。やることはもっとほかにたくさんあったのではないかと思います。

2つ目は、当時の研修主任から、2年間の算数研究をしていて、研究発表が終わったところで新しい教科で研究したい、国語の「伝え合う授業を研究したい」ということで、進めることになりました。

この家族を伝え合う、コミュニケーションで笑わせたら素敵じゃないかと思いました。日本の文化には、何か素敵なコミュニケーション文化もあるのではないかと考えていたら、演劇・コント・漫才……。議論の文化はたくさんあります。シンポジウムや、ディベート等。けれども、コミュニケーション文化はないなと思っていました。その時にコミュニケーション文化って考えると、漫才の言葉、やり取りが1番面白いんじゃないかと思ったのです。教頭先生を始めとする幹部を集めて「どうだいやってみないか」と相談したら、「面白い、校長先生」とみんなが言ってくれて、「じゃあやってみようか」と決まりました。前年度に大宮に吉本興業ができたので吉本興業に連絡を取って「協力してもらえないか」と相談したら、「協力します」と言ってくれました。事情を説明して、国語の研修の中で漫才、伝える力を行っていきたいことを話をして、タッグを組むことになりました。

ところが困ったのは、漫才というと、どついたりバカにしたりということで非常にマイナス的なものも内包しています。学

校では理解がされ難いと思ったのです。そこで、「暴力とマイナス的な言葉」に関して、この2つを使わなければいいのではないかと思いました。そこで簡単に笑いを整理してみたのですが、笑いの種類には、「温かい笑い」と「冷たい笑い」があります。この「冷たい笑い」がいじめを生み出しているのだと思います。では、ここを外して温かい笑い、朗笑、大笑い、微笑みを明確にねらいとしてやっていけば面白いと考えたのです。

「温かい笑い」に関してはその効果も色々なところで言われています。例えば、脳の活性化、血行促進、それから自律神経のバランス、筋力アップとかストレス解消になります。「ミラーニューロン」という神経細胞があつて笑顔が伝染すると言われていています。例えば1人が笑います。私が笑うと何人かそれにつられて笑います。笑顔になります。3人笑うとまたその倍数増えていって9人。9人からまた27人と増えていって温かくなるという、笑顔の伝染です。600人いた東越谷小学校では、そこに保護者、地域の方を入れたら体育館中が笑顔、笑い声が伝染していくのです。こういう空間は感じたことがなく、漫才文化の魅力の一つです。本当に驚きました。

マイナス言葉と暴力と棘を温かいコミュニケーション、漫才を通して温かい笑顔、温かい笑い声を作れば、心理的安全性が担保されていくのではないかと考えたのです。

(3) 教育漫才の方法

【ゲスト】実は私自身、漫才を見たことが

なかったのです。どちらかというと言語のほうが好きで、浅草とか末廣亭とかに出かける感じで漫才は一回も見に行っただけでなかったのです。そこで吉本興業大宮劇場の紹介で放送作家の金井夏生さんに学校に来ていただき、90分の漫才研修をやりました。そこで「三段落ち」という言葉を初めて教えてもらったのです。30分ぐらいのガイダンスをやって、それをベースに先生方がペアを組んでネタを考えて、全員のペアがそれぞれのネタを発表したのです。そのネタ、三段落ちが面白くて、先生ペアは上手で大笑いでした。PTA広報部も入って、特集を組んでくれました。

子どもたちには6月朝礼の校長講話でパワーポイントを使って、漫才大会についてプレゼンをしました。こんな感じです。

「校長先生が1番嫌いなのは何か知っている?」「(子どもたち) いじめ。」「そうだね。じゃあ、いじめって、『暴力と言葉』なんだよね。この2つ使わない文化をやらない?」「(子どもたち) 何ですか?校長先生。」と対話が進む。スライドを使って、「漫才だよ。」「(子どもたち) 漫才やっていいの?」と対話形式で、おもしろおかしく導入をすることができました。

各クラスに落として行く時に大きなポイントは次の4つです。

1つ目は、校長としては原則「くじ」でやってもらいたい。難しいところはくじでなくてもいいですが、やはり人間関係を観察してみると、意外と登校班が一緒であるとか、席が一緒であるとか限定された子どもの中でしか会話がなされていないのです。「もしよかったらくじで一定期間やってみない?」ということ提案して、多くの

クラスがやってくれました。

2つ目は、「三段落ち」の型を使うことを基本とします。しかし、今の子どもたちはYouTubeや、テレビで漫才を日常的に見ているので5-6年生はオリジナリティを出していきます。1年-2年生は三段落ちの型。まだ1年生は文字を書けない子どももいますけれども、1年生の先生から相談を受けて「会話で決めていくのもいいでしょうか。」「もちろん、いいよ。」と緩やかな感じで入っていったところがあります。

3つ目は、教育漫才の大きなポイントはマイナス言葉、死ね、うざい、ムカつく、消えろという言葉を使わない。叩く、蹴る等を使わない点です。これを重視して、あとは比較的自由にやったところがあります。

4つ目は、この時、研修として、国語科でやっていたのですが、後に総合的な学習の時間と学活も活用して進めました。基本的な取り組み時間と流れについて説明します。

最初はチーム決めです。ねらいを示して、次はネタ作りです。3時間目には、兄弟チームで発表を見せ合う。先生が全てを見るのが大変なので本当の意味での「学び合い」です。ペアを決めて互いに指摘し合う。先生は遠巻きにそれを見ています。4時間目に学級漫才大会で、最後に投票で選ばれた子どもたちが全校の前で発表するということで基本的には5時間で実施していました。先生方は練習させたりとか昼休み使ったりと苦労はあったと思いますが、基本的には5時間でという形でカウントしていました。

教育漫才スタートは、ペア同士で自己紹

介をします。自己紹介はすごく大事です。例えば、「何が好き？」と言って「アイスクリーム」「あ、僕もアイスクリーム」「じゃあ、コンビ名『アイスクリーム』にしようか」という形で共通点を見つけながら進めます。あるいは「へーそうなのだ。スポーツが得意だから、スポーツネタで行こうか」というように趣味とか好きな物でネタを作っていくところもあります。兄弟ペアは、互いのペアが見合っ互いに、よりよい教育漫才を創り上げるためのアドバイスをしあいます。この指摘し合うという関係性が、温かい人間関係を作っていきます。

(4) 教育漫才の効果

【ゲスト】東越谷小学校に異動したときに気になったのは、「学校が楽しい」という数値が85.7%だったことです。教育漫才をやり始めてから3年後の28年度にアンケートを取ったら数値が95%に変わってきました。「進んで発言できるか」という項目も69%だった数値が85%くらいになって、先生方も教育漫才をやってから、「学び合い」授業でも子どもたちの発言が「今まで発言しなかった子どもから出るように変わってきた、活性化しています」ということで、すごく喜んでくれました。保護者にもアンケートをとったところ、学校評価で「温かいコミュニケーション能力がほっこりした人間関係力を高める教育漫才はどうか？」という項目で、アンケートを取ったら保護者の中で97.5%という数値で、アンケートの中で最も評価が高かったのがこれだったのです。だから保護者の方は教育漫才、いわゆる地域を招いて保護者

にも公開するので子どもたちの楽しそうに笑っている姿を見て、悪い感情を持つ方ってほとんどいないのだということを感じて、教育漫才が持つ危険性を除去してやると、こんなに素敵な文化であると伝わったと思ってとても嬉しかったです。

日本の教育の中でやっぱり1番問題なのは、言葉なのです。それともう一つは暴力なのです。先ほど言ったように自殺・不登校はほとんどが言葉から生まれてくるのです。道徳教育の要は、「言葉と暴力」、ここだと思っています。それがこの教育漫才を体験することで心の中にストーンと直球で入っていくのです。どんなに座学で価値項目に関して「あーだ」、「こーだ」とやったとしても教育漫才は笑いながらストーンと腑に落ちていくのです。そこに相互承認の感情が生まれていくのです。

私は道徳教育の中核はこの「言葉と暴力をしない」を大事にする子どもを育てるということが最も大切な項目なのではないかと思っています。その上での相互承認なのではないかと思っています。

今の日本の教育のあり方は非常に「善い教育」を目指していると思います。より善い人生を歩んでほしいということ。小さい頃の子どもは学習意欲や遊ぶ意欲がすごいです。ところが学校に来るとやらされ感満載なので息苦しさをを感じるわけです。そこでドロップアップしてしまう子どもたちもたくさんいます。そこで学校や校長は教育課程を変えることはなかなかできないので、与えられた枠でどうやればいいのかということで創意工夫するわけです。それが教育漫才や、特色ある教育なわけです。私は「快の教育」を入れたいと思っています

「教育漫才」と向き合う

す。快とは、楽しい教育で、子どもたちが笑顔でワクワクする教育です。快と善、これらのバランスをとっていくことが自殺・不登校・いじめを予防していく大きなツールなのではないかと思っています。その具体的なツールの一つが、教育漫才なのです。

私は、東越谷小学校に5年、越ヶ谷小学校に2年いて、そのあとのコロナ禍1年目に200人の小さな新方小学校の方に異動してきました。その時に校長として腹をくくって来たところがあります。「学校は希望・光を見せる場所」、それから「学校が変われば社会が変わっていく」のではないかという視点で、新方小学校から子どもたちの姿で発信していこうと思いました。

教育漫才の実践、意見をつなぐ学び合いは4月から先生方に提案していました。子どもが登校した6月頃から進めていきましたが、どうもコロナ禍で子どもたちの元気がない、ということで6年生の先生から9月に「温かい漫才、教育漫才を教えてください」と声がかかり、スタートしました。その温かい教育漫才をすることによって、6年生の先生が「『意見をつなぐ学び合い』をしたいけどなかなかうまくいかない。でも笑い、教育漫才をやることによって子どもたちが変わってきそうだ」と言ってくれました。最初は「お笑い係に教えてください」と言ったのですが、ガイダンスを開いたところ、担任の心に響いたようで、「クラスみんなでやりたいので、時間を取りますので教えてください」ということになり、2学期の特活、総合的な学習の時間等さまざまな時間を使いながら教育漫才を実施しました。12月4日の授業参観には保護

者に見せたり、12月16日にはプロの漫才師（ジナンボーイズの嶋原さん）を招いて分析会をやったりしました。当時はコロナ禍でまだ歌を歌えない時で、音楽主任から「6年生がやっている教育漫才を音楽朝会の代わりにやりませんか」という呼びかけで、『教育漫才朝会』が提案され、そこで6年生の7チームが立候補したらしいのですが、予選で落ちた3チームが「どうしてもやりたい」というので自主的に体育館に子どもたちを放送で集めて開いたりしました。私はこういう姿勢が大好きなのです。子どもたちが自分たちで学校でねらいを明確にして主体的に活動するということが大好きなので、すごく嬉しかったです。2月18日には6年生の方からコロナで思い出が少ないので「文化祭」をやりたいという意見が提案されました。そこで、先生たちと相談しながら進めて開催しました。「6年生を送る会」でも保護者を変えて、低学年の子どもたちも教育漫才をしてくれました。修学旅行、それから林間も3月に実施しました。修学旅行では3月15日、子どもたちは鎌倉と箱根へ行きましたが、そこでやった夜のレクリエーションはなんと教育漫才大会だったのです。

次の作品は、6年生の卒業文集に書かれたものですが、少し読みたいと思います。

「私は、6年間で1番思い出に残っているのは、教育漫才をした最後の一年です。今年は、コロナで家に居る時間の方が長く、行事などの事があまりできずに悔しかったけど、自分たちが考えたことを5年間でやったことがないことができて嬉しかった

たです。その中でも特に漫才が心に残っています。漫才は最初は恥ずかしかったりして、やりたくなかったけど、今になるとやってみるとよかったと思います。3回コンビ・トリオを作ってネタや動きを考え、全部楽しくてファイナルにも出場できたし、漫才に興味がなかった私でもこんなに楽しいと思えたのは、先生たちのおかげなんだと思いました。声量も5年生のより大きくなった気もするし、発表回数も上がって、1年間があつという間に感じました。ネタ作りも含めて、漫才に取り組めたことが本当に良かったと思います。漫才のおかげで普段あまり関わらない人とも関わったので5年生のときよりできることが増えたので良かったと思います。他にも、漫才やアナウンサー教室などの新しいこと、いつもと違う形でやった1年生を迎える会など5年生までとは違うことができた最後の1年が1番思い出残りました。中学校に行ってもコミュニケーション能力を上げるために、初めて会う人とも関わることができるように、漫才で学んだことを生かして、中学校でも生活していこうと思います。漫才をやってできることが増えたので、この調子でもっと増やそうと思います。」

卒業文集に書かれるものは大体が行事です。授業のコミュニケーションのことを書いたっていうのはすごいことで、他の子どもたち7人も教育漫才のことを書いてくれて、非常に子どもたちにとってはインパクトが大きかったのだらうと思います。この子は自己肯定が高まっているということと、コミュニケーション能力が上がったというのは読んでいただければわかる

と思います。さらに、私が驚いたのは、「このコロナ禍の1年が12年間の人生の中で1番楽しかった」と言ったことです。これには私もさすがにグッとくるものがありました。

今年コロナ禍の一年を経て、学校教育目標を「創造してたくましく生きる。自立・相互承認・表現」と変えました。コロナの影響によって、今までと同じような教育をしては太刀打ちできないと思ったので、先生方との合意形成を図り、目標から変えました。

総合的な学習の時間で3年生から6年生の合計140人程度を体育館に集めて行っています。なぜこのようなことをしているかということ、やはり同質集団だけであると息苦しくなり、それを解放したいと思い異年齢で行おうと考えたのが一つです。それから、金曜日の3時間目と4時間目に入れたのは、土曜日、日曜日につながるということと月曜日从不登校が始まるケースが多くあるので、自分の好きなことをさせたいと考え、「面白いから学校に行ってみよう」と思わせるというねらいがあります。一学期は、表現力の育成を目標に総合的な学習の時間で実施しました。本校の子どもたちの実態から、表現が弱いので、教育漫才を通して表現力の育成を図りたいという研修主任であり、総合的な学習の主任から提案があつて教育漫才を実施することになりました。第1回目は同質集団ということで同じクラス。第2回目は異年齢集団でくじを引いてコンビを組みました。3年生と6年生が組んだり、3年生と4年生と5年生がトリオを組んだりといった形で行いました。一学期はやはり相互承

認ということで互いに認め合う。くじを引くけど嫌な顔をせず互いを知りあうことを前提に総合的な学習の時間の主任が進めてくれたので、「組みたくない」といった声が一切なく、一人一人が大人になってメタ認知を持って、自分たちで自律して対応してくれました。

これが相互承認ですね。お互い認め合おうということでやってくれました。今は「SDGs」をテーマに探究学習に入っています。

自殺・不登校・いじめの対応として、一つは、「みんなで意見をつなぐ学び合い」等、もう一つは、「表現力、温かい教育漫才」等を通して、心理的安全性を担保しています。この他にも様々なことをしています。子どもたちが提案した文化祭をやらせたり、子どもたちが主体的にやりたいこと等をやらせたりしていて、これが「21世紀をたくましく生きる力」につながり、今回の学習指導要領に新設された「持続可能な社会の担い手」になっていくのではないかと考えています。

(5) 質疑応答

【参加者】すごく楽しそうな学校だなと思いました。仲のいい子とだけやるのではなくて、自分が今まで関わろうと思わなかった人とコンビを組んで1つ教育漫才をするということを通して仲のいい人以外にも関わっていきこうと思えるような教育がすごくいいなと思いました。これに対して、卒業して次の学校に入ったときに必ずしもいい顔をしてくれる生徒ばかりではないと思うのですが、いかがでしょうか。

【ゲスト】今年卒業した子たちは教育漫才が楽しかったみたいで、特にコロナ禍で様々な教育活動が停滞している中で、距離感を取って「コミュニケーション」、「意見をつなぐ学び合い」もマスクをかけてやってきて、教育漫才もフェイスシールドをかけて実施していたので、それがいい印象として残っていて、中学校でもしたいと考えている子どもたちもいました。そこで、担任の提案で、「市内の中学校で教育漫才大会をしよう」と話してくれたので、それぞれ中学校を選んで別れた子どもたちがそれぞれ中学校に行き提案したのです。ところが、なかなかそれを受け入れてもらえないようです。ただ学校のやり方もあるので、新方小学校のような形でできなくても、例えばお笑い係から進めてみるとか、子どもたちの中で相手にちょっと強いことを言われたときに切り返すことができるか、それは日常生活の中にも生きて行くのではないかと思います。私は校長として、小中一貫研究校の研究をしている相手校の中学校校長とよく相談しているのは、本校が実施している「意見をつなぐ学び合い」を研究校3校で取り入れてやっていきたいということです。それで授業を見に来ていただいたりしています。まずは授業で「意見をつなぐ学び合い」を見せて、教育漫才の存在を先生方にも伝授しながら意識改革を図ってやってきたいと考えています。これは校長の務めであると思います。良きものは子どもたちの根っこに必ずなっていくので、教育漫才そのものでなくても人とのコミュニケーションの中でそれが生きるのではないかと捉えています。

【参加者】発表できない状況というのが、中学校高校において雰囲気としてあったので、その前提を変えようとしているのが素晴らしいなと思いました。中学校から高校へのつながりや小学校から中学校へのつながりを考えたとき、自分にとって普通だと思っていたことが普通でなくなることが起こって、行った先が合わなくなり通信制に通うという子どもが身近にいるのですが、話を聞くとつながりができていないことに気づきました。先生の場合つながりを作るためにどのようなことを行いますか。

【ゲスト】東越谷小学校で漫才を開発した時に、中学校の先生が教育漫才を見に来てくれたのです。それで「すごくいいね」と言われて、東越谷小学校から上がった生徒を中心に、冬のスキー教室の夜のイベントでその子どもたちに教育漫才をやらせたりなどして、漫才文化を受け入れてくれたのです。やはり見てもらったり、来てもらったりすること、つまり交流が重要だと考えています。確かに文化の継続というのが大事なのかなと思っています。越谷では小中一貫という形で小中学校のブロックを組んで連携を図っています。今、お話し頂いて私もすごく参考になりましたので、是非私も良さを伝えて小中一貫で合同の教育漫才大会などをしても面白いのではないかと思います。大胆に考えて進めたいと思います。

もう一つの考え方として、社会というのは環境によって変わっていくものなのです。小学校から中学校が同じでなければな

らない、中学校から高校、大学が同じでなければならぬという捉え方ではなくて、様々な価値観や教育観があってその中で自分をどう表現していくのかということプラスに考えていくといいのではないかと思います。小学校と違うから困るというのではなくて、小学校と違うからどうやって自分を自律させて表現していこうかと考えることが生きる力になるのではないかと考えています。

【参加者】講義や事前に Twitter を見させていただいて、とても楽しそうな雰囲気だなと思いました。どこの公立学校でも教育漫才はできるものなのでしょうか。

【ゲスト】できると思いますよ。この間、愛知の小学校の校長先生から電話がかかってきて、一宮市では学芸会を実施しているそうです。1年生から6年生、特別支援学級の子どもの発表するというので、そこで「教育漫才をしたいので教えてもらえませんか」という依頼を受けました。夏休みに教えに行き、終日かけて教育漫才研修を体験してもらって11月6日に教育漫才大会を、保護者にも公開して学校をあげて実施しています。この間は小田原にも行ってきました。例えば、総合的な学習の時間がありますね。総合的な学習の時間は各学校が子どもの実態や地域の実態に合わせて、学校が決めていいものなのです。ところが文科省が国際理解や健康、福祉などを入れ込んだために、まずはそれをしようというのが全国的に広まり、先生方がやりやすいような形で学年ごと、学期ごとにプロジェクトを決めてしまいました。私から言

わせてみると座学的だなと思っています。子どもたちにとって必要だから、取り組むプログラムでなければ、総合的な学習の時間のねらいと合致しないと考えています。例えば、いわゆるカリキュラム・マネジメントの中で教科等横断的視点、データの活用、地域の人材・施設を活用するという3つが大きな柱として掲げられました。東越谷小学校での子どもたちのアンケートでは当時「伝え合う力」が69.5%しかないわけです。さらに保護者も学校評価で、表現力、コミュニケーション力の育成を期待していました。これを踏まえて、笑いの教育を入れるというのは地域の実態や子どもたちのニーズに合っているのです。学習指導要領の中では、国語や算数に関しては、縛りがありますが、この総合的な学習の時間が、各学校の特色を出すことのできる時間で、これから教育の要になっていかなければならないのではないかと私は思っています。だから新方小学校は1学期に総合的な学習の時間で3年生から6年生は教育漫才、表現力に力点を置いて取り組んできました。これは法律違反ではなくて、まさに遵守しながら、特色のある教育活動であると自負しています。教育漫才に共感してくれればどこの学校でもできます。

【参加者】そもそも人と関わるのが苦手な生徒に対しては、無理やりさせるものなのでしょうか。「冷たい笑い」と「温かい笑い」の話がありましたが、笑うこと自体が嫌いという人に対してどのような対応をされますか。

【ゲスト】最初の質問に対しては、最大限

配慮します。例えば、コンビだとプレッシャーがかかるので、苦手な子はトリオなどにして前に出て少しの役だけでいいようにします。それでも嫌だという子は音響、めくり、見学でもいいというようにして、次の機会にしたいくなったらしてみようかという形で子どもに選択させます。実際にあった話ですが、本校にも話すことが苦手な子どもがいて、「どうする？」と聞いたところ「やりたくない」と言ったので見学させましたが、2回目のときには、トリオで組んで参加しました。この子に対してはだれと組みたいかを確認して配慮して、その子の意に沿って話しやすい子どもを2人付けました。そして3人でトリオを組みました。その子は言葉を発しませんが漢字が得意な子だったのでマジックで書いて、オチでめくりをして参加しました。だから強制するものではなくて、形としては全員参加ですが、やりたくない人は見てもいいし、お手伝いでもいいという形で自己決定させています。

笑いたくないという人がいるというのを初めて知りました。笑わなくてもいいと思いますよ。ただ、見ていけばいいと思いますよ。笑いの力がこういうものかどうかということを知ってもらい、体育館に600人、800人が入ればものすごい温かい空気が流れ、その波長を感じたときに、その子が「笑っていいな」と思えばいいと思います。それも決して強制するものではなく、個人的性質とか内面、バックボーンというものがあるため、「笑いなさい」と強制するのではなく、みんな楽しいから笑えればよくて、それは自然発生的なもので、教育もそうであると思います。「あれをしろ」、

「これをしろ」(外発的動機付け)と言われ
 るのはとても息苦しくなるので、そのあ
 たりは寛容にする必要があると思います。
 私は今の教育では寛容さが非常に重要な
 のではないかと考えています。不登校など
 を生み出す大きな要因は、学校がもつ余裕
 のなさや寛容さのなさが大きいのではない
 かと思っています。「笑う門には福来る」
 は確かなのです。笑っているといじめはな
 くなっていきます。いじめはダメというよ
 りも教育漫才をして、「暴力とマイナス言
 葉をやめよう」(内発的動機付け)と感じ
 た方がずっと効果があるのです。例えば、
 いじめが起きたときに、「なぜ新方小学校
 は教育漫才をしているのですか」と聞きます。
 「暴力をしてはいけない、マイナス言
 葉、人を傷つけるようなことをしてはいけ
 ないから」というように、振り返りの中
 で言葉が出てくるのです。

【参加者】笑いについてですが、笑ってい
 る人間を信用できない、運動会や文化祭な
 どでみんなが笑っている環境にいるのが、
 嫌な場合はどうしたらいいのでしょうか。

【ゲスト】今いろいろと言われているのは、
 「心を1つにしろ」とか「団結しよう」と
 いうことに関して抵抗を持っている子ども
 たちがいるのではないかということです。
 そうではなくて相互承認という形で1
 人ひとりを認めてやるべきだと思います。
 日本の教育というのは笑いを十把一絡げ
 にしているのです。「笑いはだめだよ」と
 いうように。ここでは言葉のやり取りで、
 同音異義語で面白いから笑ってもいいと
 ころなのにそれさえも「だめだ」と思い込

んでいるところがあるのではないかと考
 えています。「冷笑」と温かい「朗笑」を
 混同しているのです。だから言葉のやりと
 りは、本当は面白いものなのです。同音異
 義語といった同じ言葉で、例えば飴と雨と
 いうように「アメが降ってきたよ」「本当
 に？」と喋って口を開けてみたら飴玉が落
 ちて来た……そういうところでちょっと
 笑えたりするところありますが、友達の発
 言に関してマイナス的な雰囲気が出て、馬
 鹿にしたような笑いが出たときに、先生
 が道徳心をもって止めるじゃないですか。
 そうなると、そういう言葉のやりとりとい
 うのは、極端になると、笑いがすべてダメ
 みたいな捉え方がされることがあります。
 私はここをきちんと分けて温かい笑いを
 学校教育の中に入れていきたいと思っ
 ています。

【参加者】私は、教職を取っていますが、
 教師に対して不信感を持っているから教
 職を取ったということがあります。

【ゲスト】私もそうです。私もいい教師に
 出会ったことがなくて、大学生の時に自分
 が夢や希望を語ることでできる教師にな
 ろうと思ったのです。ポジティブな先生だ
 けじゃなくてクールに構える先生でも共
 感してくれる子どもがいます。学校とい
 うのは多種多様でさまざまな人間
 がいていいものなのです。だから一緒に変
 えましょう。「みんなで笑おう」そういう
 ことは言わないで、一人ひとりを認められ
 る先生がいてもいいじゃないですか。

【参加者】「教育漫才」を聞いた時は、教

育に漫才というおふざけの部分を入れていいのかと、少しマイナスなイメージもありましたが、今日のお話を聞いて漫才の力や笑いの力、コミュニケーション能力がすごいということを改めて感じました。また、表現することが苦手な人でも漫才という形であれば、全校生徒の前とかで発表することができたりして、とても良い機会の提供を漫才という形でやっていていいなと思いました。

【ゲスト】良かったら見にきてください。今度、総合的な学習の時間ではないのですが、4年生も子どもたちの中からもう一回教育漫才をやりたいと言い出し、クラスでやると言っていましたし、6年生も子どもたち、それから先生もやりたいということです。教育漫才を1学期にずっとやってきて、その後2学期は、「SDGs」に入りましたが、この12月末から、子どもたちにとって笑いの文化がすごく楽しかったらしく、もう一回やりたいということで火がついているという感じがします。意外と子どもたちって相互承認とか互い認め合う個性というのは、教育漫才を体験することでストンと腑に落ちると思います。くじでやるということに関しての抵抗がなくなってきました。

去年とても面白かったのは、3月に修学旅行があり、そのときの部屋割りで議論していたのです。朝の会で何をやっているのかと思ってみたら、「部屋もくじで決めよう」と言っていたのです。もちろん男女別れましたが、そのくらいみんなで絡み合うことが実は子どもたち自身が求めているのだと感じて、その良さというのは意

外とくじでやると、気の合わない子がいるだろうけど、短期間なのでちょっとやってみようかなと変わっていきます。教師が掲げる理念をきちんと伝えれば、子どもというのは本質を見抜くので心が動きます。そうすると安心して（やろうかな）となっていくと思います。これこそが、教育が変わっていくということなのかなと思います。

【参加者】自分も小学校の頃に、総合的な学習の時間に漫才的なことを小学校の5、6年生の時に好きに活動していいということで、自分と仲良い友達何人かで漫才をして楽しい空間を作れた覚えがあったので、小学校だからこそ小学生がやったとしても周りの人に来てもらえ、楽しい空間を作れるのだと思うし、暴力的な発言をなしにすることでいい空間を作るというのがとてもいいことだなと感じました。

【ゲスト】私は、中学校の国語の教師なのです。教頭まで中学校にいたのですが配置の関係で初めて小学校に校長として入ったのです。だから私は中学校でも校長であれば、教育漫才をやりたいなと思います。特に不登校は中学校になると多くなるのでコミュニケーションの活性化を図りたいです。

私自身30代から中学校で長きにわたってコミュニケーションを核とした授業をやってきました。「意見をつなぐ学び合い」がすごく活性化いたしました。だから中学校になると話ができなくなると聞くとちょっと違うような感じを覚えます。小学校でも中学校でも、人間関係を……コミュニケーションの力を育てるのに、教育漫才は

効果があると思います。

【参加者】私も小学校の時に2年ほど担任をしてもらった先生が総合の時間に力を入れていまして、その中でクラスの人たちでいくつか企画を練ってそれをクラス全体でやろうということをしたことがありまして、そこでお笑いをやろうと言っていたチームがあったので思い出しました。

話の中で総合的な学習の時間がその学習の要になると言われていたと思うのですが、総合的な学習の時間でたくさん話すことが多く、話し合ったりとか今までの自分の知識を総合的に使う場面が多いので、今後どうやって使うのか、今後どう知識を深めていけばいいのかというのも身に着く学習なのだというのがわかりました。

【ゲスト】学校教育というのは、例えば、総合的な学習の時間を取ってみてもそうですが、「探究をしました。」「協働しました。」「体験をしました。」「ではノートにまとめてごらん、新聞にまとめてみてごらん」という形での締め括りが多いと思うのです。

私はプレゼンテーションまでいかない子ども自己肯定感や達成感はないだろうと思います。やはりそれは本校の子どもたちの大きな課題でもあるということなので自己肯定感も上げていきたいと思っていて、そのためにポジティブに子どもたちが「快」を感じるような表現方法を1つ、さまざまな表現方法を子どもたちに選ばせたいと思っています。ここがとても大切な視点だと考えています。

【参加者】偶発性といいますか、同質的な集団でないところで色々な人を引き合わせるのか、あるいは今まで話をしてこなかったりとか関わりがなかったりする子どもたちを引き合わせるという意味でも偶発性がポイントかと思いますが、それについてはどのように考えていますか。

【ゲスト】子どもたちを観察していると、多くの子どもたちが例えば「何人と話をしたの?」と質問すると数えるほどの人数しかあげなかったりするのは。異年齢集団の特活で「ゲームして遊ぼう」という縦割り活動もあるじゃないですか。そういう組み立ても1つあるでしょう。

総合的な学習の時間も学校の特色を出せるということで本校は小さい学校なので3年生以上で全部やれると踏んで体育館を活用して始めました。その意図はさまざまな人と関わらせたいということにあるのです。色々な価値観があり、多様化と言われている中で、教室でいつも競争ばかりさせられるような集団の中に居ると息が詰まるだろうと思って、この同質集団が不登校やいじめを生み出していると考えています。週に一回ぐらいはそういう集団を解放しながらみんなで人間関係を広げていくことをして、偶然性で広げていく教育を意図的に作ってあげないとなかなか消極的な子どもも多いので、教師の意図やねらいを明確にして、様々な創意工夫をして働きかけていくことが大事だと思います。

【参加者】誰かを表彰したりとか褒めたりすることに疑問を呈されていたと

思います。ただ、学校現場では頑張った、あるいは努力をした子、例えば、何かで表彰された子をみんなの前で表彰することがあります。みんなの前での表彰を喜ぶ子もいればそうじゃない子もいると思います。褒める行為に対しても違和感を持たれている理由は何ですか。

【ゲスト】基本的には「みんな同じ対応をしたい」と思っています。例えば、ある子が走るのが速くて、美術で、音楽で表彰されたというのは、その子自身が達成感を持てればいいことです。

今提案しているのは12月10日に表彰をするのですが、校長としてはこれを最後にしたいと思っています。3学期からは校長室でそれぞれの子どもたちを呼んで校長が直に渡して褒め称える。それはもらえなかった子たちに見せるようなことではないと思うのです。もしかしたら、私たちは、美術の表彰、体育の表彰等で優劣をつけているのではないか、優劣をつける教育をやめようということを私が今、先生たちに提案して、考えてもらっている最中です。ただ長い歴史の中で表彰したり、称えたりする教育、例えば、持久走でも順位をつけることに関してはある程度成果を上げてきているのですべてを否定しようとは思いませんが、あまりにも優秀者を讃えて、他の子の目標にして、目指させるという教育が多いと思います。日本の教育の中で自己肯定感が上がらないのは当たり前やってきたこのような序列教育、順位教育が、自己肯定感の育たない要因の一つだと考えています。「あの子には敵わない」「またあの子が舞台上上がった」という時間で多

くの子どもたちの自信を喪失させているのです。表彰された子はもうわかっているはずです。それを何回も繰り返し壇上にあげる必要や、みんなの前で名前を呼ぶという必要はなくて、校長室で「素晴らしいね。あなたの個性を活かしなさいね。」というたった一言でその子は根っこが育っていきますし、別の子は美術が好きだけど苦手、でも好きだから絵が描きたいという子は「自分も頑張ってみよう」と、自分の価値・目標に向かって進みやすい、自分の可能性を信じやすいと思っています。教育は、みんなが同じように夢を持って希望をもてる場所でないといけないと思います。「人と比較させられる教育」を立ち止まって考える時に来ていると考えています。

【参加者】とても積極的でクラスの中で発言をしてくれる子は実は学級経営上都合のいい存在かもしれませんが、相互承認の価値を考えた場合、そういう子に頑張るなと言うわけにはいかない、空気を読めと言うわけにもいかないと思います。どのような言葉かけをされますか。

【ゲスト】私は国語で担任やっていましたが、私ならば、こう語ります。

「クラスに30人いるよね。発言が好きな子、苦手な子とかさまざまだね。でも生きて行く上で自分の気持ちを伝えるってことはとても大事なことだと思う。あるいは、言葉を通しながら自分の考えをまとめる事って大事だと思うのよね。だから苦手な人にもちょっと頑張ってもらいたいし、得意な子はそういうことを考えてやっ

てもらいたいのだよ。1つ提案なのだけど1時間にさ、1人2回までっていう限度を決めたいのだよ。どうだろう。そうしないと30人が2回発表すると60回。1人1分だと時間が足りない。だから1時間には多くて2回までにしてくれないかな。そしてもし発言が嫌で苦手な子でも、もし出てみようかなと思ったらちょっと手上げてみてよ。そしたら先生がつないでいくから。得意な子は苦手な子にちょっと寄り添って、『頑張れよ』とか、勉強でちょっと迷っていたら確認して自信持たせて、『いけるよ』、そういう発言してくれないかな。」

いわゆる発言することを良きことと捉えるのではなくてある程度制限をかけていく、2回の上限とか3回の上限を決めることによって子どもたちの相互承認という視点が育っていくと思います。

【参加者】総合学習を校長が推進することはあまりないと思っていましたが、チームとしての教師集団をどのように作っていくべきか、教えてください。

【ゲスト】総合的な学習の時間の主任にほとんど任せています。私は子どもの前に立っていません。いわゆる評価とか、最後のところで校長先生出てくださと言われて時は出ます。しかし、普段は校長室にいたり、体育館の後ろで黙って見ていたりして、ほとんどは任せています。私が掲げるのは理念で、実は教育漫才も私からの提案ではないのです。総合的な学習の時間の主任が、表現が課題なので教育漫才をやりたいということで実施しました。一回目で終

わらせて、次に「SDGs」の学習に入りたかったのです。ところが「異年齢でもう一回やりましょう」と提案されました。私がやりましょうと言うわけではないのです。私は総合的な学習の時間は異年齢でしたいと思っていて、その方が、より教育効果があり探究的な学習にピッタリだと思っています。小さい学校だからこそできる本来のあり方を戻そうという理念を掲げて、あとは先生方に任せているだけです。外部講師を呼びたいというときは、私が交渉をしてきて、予算は教頭先生が対応するような形でバックアップはします。

皆さんとこうやって出会えて、教育漫才を少しでも知っていただいて、そのバックグラウンドを理解してもらって共感してもらえたら嬉しいです。現場あるいはそれぞれの道に進んだときに自殺・不登校・いじめが教育の中の本当にマイナス的な要因として子どもたちの夢を奪っていると思うのです。目の前から子どもが去っていくことは教師にとって1番辛いことですし、親御さんにとってもこれ以上の悲しいことはないと思います。皆さんと共に、日本からそういうマイナス的なことを出さないような形で取り組んで行けたらと思っています。ありがとうございました。